

<概説>

台湾の東南海上に浮かぶ島、蘭嶼 (Orchid Island) にはヤミ族が住んでいる。彼らは、代々伝統のトビウオ漁に使うチヌリクラン (cinadkeran/Cinedkeran) という 10 人乗りの構造船を造ってきた。口承によれば、この舟が何百年もの昔、彼らの祖先たちをフィリピンのバタン諸島から蘭嶼という新しい地に運んできたのだという。この船は、毎年 3 月から 6 月に巡ってくるトビウオの季節、島の沿岸を北上するこの回遊魚を捕らえるために使われる。トビウオだけではない。カジキマグロやシイラといったトビウオを捕食しようと追ってくる大魚も捕まえるのである。

2004 年の初頭、紅頭村 (Imorod) の住民たちは、27 年振りでチヌリクランを建造することになった。2004 年から 2005 年にかけて、私はヴィジュアルフォークロア (日本の民族誌記録映画会社) に在籍し、このチヌリクラン建造の全過程、すなわち最初の木を切り倒し、板に削り出し、木釘を打ち、彫刻し、色を塗り、そして最後の一風変わった船降ろし儀礼にいたるまでの工程をつぶさに記録することにした。そして、村人たちが最初の木を伐採してからほぼ一年後、私は再びこの島にもどり、落成したチヌリクランがトビウオ漁の初航海に乗り出す映像を撮影した。こうして 2 年を費やし、映画「チヌリクラン」が完成した。これには「アラヨの歌」という同時期に撮影された短編が付録で付いているが、これはトビウオ漁の時期にシイラ (ヤミ語で arayo) を捕りに出かける一人の古老の物語である。

蘭嶼の構造船チヌリクランは、その際立った美しさからつとに有名で、船づくりの技術は島で神聖視され畏敬の対象となっている。20 世紀に至るまで、ヤミの人々は石斧で舟の形を整え、ネワタ (ヤミ語で varok) という綿のような植物の細根を使って板材をつなぎ合わせていた。さすがに今日では鋼鉄製の斧と接着剤を使っている。しかし船の建造技術は、幾世代にもわたって伝えられてきた伝統的なもので大した変化はない。今も昔も、船造りに長けた男がヤミ社会では高く評価される。

しかし、2004 年で、これまでともっとも異なってきた点は、疑いもなく、紅頭村 (Imorod) でチヌリクランが作られるその社会的背景である。それまでは、村の中で格別尊敬されている人物が自分の親類縁者を呼び集め、漁撈組を組織した。この漁撈組の共同作業で舟を造り、トビウオ漁の時期にはこの組のメン

バーが乗組員となって新造のチヌリクランで漕ぎ出し、魚を捕らえ、漁獲は漁撈組仲間で分配した。ところが2004年の場合には、船の建造は「イモロッド村発展協会」という、村民なら誰でも自動的に加入する協会によって組織された。したがって2004年、イモロッド村で27年振りに建造したチヌリクランは村全体の共有の船となったわけである。

この発展協会は、船の建造にたずさわった人たちの労苦に報いるため、日当約20米ドルの賃金を支払ったが、これには発展協会の年間総予算、約US\$55,000の内、およそUS\$2,800が当てられた。ところがこの年間予算の資金というのが、台湾電力（国営電力会社）が原発の核廃棄物を貯蔵するため、島の南部にあるイモロッド村の祖先伝来の土地を借り上げた、その賃貸料として支払ったものだったのである。「低レベル放射性」廃棄物を収納するには、この島が適していると台湾政府が決定したため、1980年代初頭から、核廃棄物が蘭嶼に運び込まれるようになっていたのだが、これは当時まだ発電能力がなかった蘭嶼にとってはまことに皮肉な決定であった。1980年代の終わり頃には島の人々も自分たちの土地に何が貯蔵されているのか気づくようになり、異議申し立てを始めた。1996年には島内の反核廃棄物運動も十分な勢力を持つようになり、廃棄物運搬船の入港を未来永劫拒否するまでになったが、しかしほぼ5万バレルに達する廃棄物が島に残されることになったのである。

総合的な科学的研究もなされないまま、廃棄物が蘭嶼の自然環境と島民の健康に与える影響について、激しい論争が巻き起こった。しかし、蘭嶼に廃棄物を貯蔵することによってもたらされる経済的効果について思いめぐらすのはさほど難しくない。台湾電力は気前よく寄付金を差し出した。たとえば蘭嶼に住む原住民は電気代がタダになり、家を建築する際にも補助金がもらえ、また船の建造のような文化活動にも援助金がもらえるようになった。こうして寄付金が島の生活の一部になってしまった。それこそが伝統的な文化を永続させるのに貢献したとさえ言うこともできる。多くの島民が、施しものに依存しながら時々軽い仕事（たとえば夏の間観光に関係した仕事）をするだけになると、もともと伝統を成り立たせる一部であった船の建造や漁撈などの活動に、かなりの時間を使えるようになったからである。やがてそのような活動はさらにいっそう永続性を持つようになった。というのは他人より上手に魚を捕まえ、よりよい船が造れる人は、以前にも増して仲間たちから尊敬されるようになったからである。

この計画が、格別に尊敬される村人の発願によって行われたものではなく、発展協会によって組織されたものだったから、2004年のイモロド村におけるチヌリクラン建造期間中、船頭（ふなおさ）の人選は決まらないままだった。伝統的に運んだなら、船頭が自分の血縁を組織し、進水式で重要な役割を果たし、さらにはトビウオ漁期にも漁撈活動の総指揮を執ったことだろう。ところが、2004年のイモロド村では、この役割を担うべき人は誰もおらず、「権力の真空状態」があったのである。

日々の建造作業では、A氏(45歳)が自らかつて出て指揮した。つまり村人たちが毎日どこへ木を切り倒しに行き板を作るかを決定し、またそれらの板を組み合わせて船を造る指図もした。ところがA氏は進水式で行われるべき式次第や伝統的な歌についてはほんのわずかしら知らなかった。それに、そういったことを習おうという興味すらなかった。しかし長老たちは、チヌリクランの船霊を怒らせないためにはそのような儀礼を行うのが是非とも必要だと信じていた。そこでB氏(68歳)という年寄りが、進水式の儀礼で船頭を務めようと申し出た。A氏は、それがおもしろくなかった。B氏がそのように申し出た時には、それが後に大きな議論を引き起こすことになるとは思われなかった。二人とも船頭になりたがったため、村人たちのほとんどが二人の諍いに巻き込まれることになった。その結果、平和だった村内にそれほど摩擦を起こすのであれば、進水式は取り止めてはどうかという事態にまで至ったのである。

A氏とB氏の二人は、どうしてそんなに船頭になりたかったのか？
伝統的には船頭の地位はヤミ族社会の中で尊敬と社会的地位を得る一つ的手段と考えられていた。だから船頭になれば、より高い社会的地位が得られると二人とも思っていたふしがある。しかしながらこの二人は原因と結果を取り違えていた。過去においては、チヌリクランの船頭になることが尊敬されることではなかった。そうではなくて、船頭という役割は、一人の男がヤミ族社会の中で特別な地位を持っていることを目に見える形で示すシンボルだった。つまり、将来に備えて木を植え、進水式のために沢山の豚やタロイモを準備できる勤勉な男だけが、そうすることで十分な尊敬を勝ち得た男だけが、漁労組織を編成するのに必要な男たちを招集することができたのだ。A氏もB氏も、どちらもこれらの準備をしたり、捧げ物をしたわけではなかったが、二人とも、船降ろし祝いで、船頭という目立つ役を務めることによって、自分の社会的地位をたちまち高めることができると、なんとなく思い込んでしまったらしい。

撮影している間中、私は何故村人たちが船の建造に参加したがるのか、また

この経験から何を得ようと望んでいるのか、理解しようと努めた。村人たちに直接聞いてみると、各人各様の動機を持っているように思われた。しかし彼らの答えを集約してみると、船の建造に参加することについては、簡単に世代差や動機づけを一般化することができた。

若い村人たちの多くは、自分たちの文化を学びたいが故に、船の建造に参加したのだと言う。ある者はさらに、美しい船を他の村から来た人たちに大いに見せびらかしたいのだ、とも付け加えた。しかしこれらの若者たちは、できあがったチヌリクランに乗って実際にトビウオ漁に出ることにはあまり興味がなさそうに思われた。それはエンジン付きのボートに乗って漁に出るという楽な選択肢に比べれば、はるかにしんどい肉体労働だからかもしれない。若者も中年の男たちも、皆、船の建造に参加した全員に支払われる日当に目がくらんでいたことは確かである。しかし中年の男たちの方は、建造技術に格別な興味があったわけではない。というのも、彼らはすでにもっと小さな伝統的な舟（ヤミ語で tatala）を造りを体験していたからである。

一方、年寄りたちは多くが、このチヌリクランづくりに何かしらうさん臭いものを感じていた。ある特定の家族によって組織された船組ではなく、村全体が関わっていたため、いくつもの禁忌（タブー）をきちんと守りながら造られた船ではないことに気づいていたのだ。

蘭嶼では、チヌリクランには強力な船霊がついており、もし禁忌にたいしてしかるべき敬意が払われていないと、何らかの祟りに遭うと信じられている。だから、村の何人かの有力者たちはこの船建造にはまともには参加しなかった。しかし、進水式の時に行われる儀礼や歌については、指導をするのにはやぶさかではなかった。

この世代差は、チヌリクランがトビウオ漁に出航する時にもまたはっきりと現れた。村の年寄りたちは、チヌリクランが完成した今となつては、それが適切に使われるかどうか見守りたいと思っていたが、自分たち自身はあまりにも歳をとりすぎていて漁に必要な激しい活動には肉体的に耐えられそうにない。中年組と若者たちは、自分自身の一人用の舟（タタラ）か、あるいはモーターボートに乗って漁に出る方が好ましかった。というのは大勢を組織化する必要もないし、労力も少なくてすむからだ。こうしてチヌリクランを造るのにあれほどの労力を費やしたにもかかわらず、2005年以來、実際に漁に出たのはほんの数回しかなく、そのいずれも格別に成果が揚がったというわけでもなかった。その時以外、このチヌリクランはイモロド村の陸地に置かれたままなのである。

撮影中に気づいたことがある。船建造の全過程、つまり、チヌリクランを造るために必要な実技に加えて歌、儀礼、ならびに禁忌のすべてに通じている年寄りは、今では村にほんの一握りしかいないということだ。悲しいことに、これらの年寄りの内の数人は、その後亡くなってしまった。

この映画「チヌリクラン」と「アラヨの歌」は、蘭嶼の変わりゆくしきたりを記録した映画となるだろうと信じている。またこの二つの映画が村人たちにも人類学者にも等しく価値のある記録となるであろうことを願っている。

イモロド村の人たちには、滞在中始終暖かくもてなして下さったことに対し心よりお礼を申し上げます。また私にこれらの記録映画を撮る機会を与えて下さったヴィジュアルフォークロアにも深く感謝申し上げます次第である。

Production Notes : ‘Chinadkeran’ and ‘Song of the *Arayo*’ <Summary>

by Andrew Lomond 『台湾原住民研究』第13号（2009年11月20日発行）風響社